

## 都市とエスニシティ 姿を現す新しい文化のかたち

町 村 敬 志

ただいま平野先生によるすばらしい報告があり、盛り上がったところでこのままお開きにするのが私の役回りとしてはいいような気がするのですが、そうもいきませんので、お話をさせていただきたいと思います。まず、こういう場にお招きいただきましたことを心から感謝いたしたいと思います。

きょう私が話をさせていただくテーマは「都市とエスニシティ 姿を現す新しい文化のかたち」ということで用意をさせていただきました。結論的にいいますと、直前にお話をされた平野先生といわば同じところに落ち着いていくのかなと思います。ただ、私の場合にはもっと具体的な、あるいはローカルな狭い話を中心にそのことを考えていきたいと思っています。

### 1. 急浮上したエスニシティ概念

最初のご紹介のなかで、私のやっていることについていくつかお話があったわけですが、本日は都市とエスニシティということで話を、と仰せつかったわけです。エスニシティという言葉、ここではごく当たり前のように使っています。たとえば書店へ行きますと、エスニシティというタイトルの本が非常にたくさん出ているのに出会います。ですから、何となく今では、あるいはとくに皆さんのような勉強を始めたばかりの方にとってみると、エスニシティというテーマはずっと以前からあって、いわば当たり前のテーマとしてあるように見えているのではないかと思います。

しかし先ほどの報告のなかでもありましたが、実際にはそうではありません。日本の場合も、戦前においては日本が東アジア、東南アジアの諸国へ侵略をしていくというなかで、拡大された帝国日本のなかにいろいろな民族の人たちが、「日本人」として含められていた時代がありました。そういう時代においては、日本という国が戦後言われてきたような「単一民族」の国ではなくて、むしろ複数の民族から成り立っているのだと主張されたことも以前にはあったわけです。ただ、戦後、そうした植民地が全部切り離されて、もういっぺん日本が狭い範囲に仕切られていくなかで、日本は「単一民族」なんだという主張が出てきて、やがてそれが当たり前のように流布していくという流れがありました。

そういうことを前提とするならば、エスニシティというテーマは、昔はあったけれども、長い間忘れ去られていたテーマということになります。それが日本のなかでごく当たり前に語られるようになったのは、せいぜいここ10年ぐらいの事柄でしかない。たとえば私の経験で言いますと、1988年ぐらいのことでしょうか。関東社会学会の大会シンポジウムで、日本にやって来たニューカマー外国人の人たちをめぐるテーマを取り扱おうとしたことがありました。今から見ればごく一般的なテーマなんですが、当時としては、そういうテーマを取り上げること自体ほとんど例がなく、そういうテーマについて話をしてくださる先生もあまりいなかったのです。ですから、1987～1988年の頃には、まだまだこのテーマは、

言ってみれば隠されたテーマであったと言えるわけです。

わずか10年ぐらいの間にその状況が大きく変わりました。何でもそうですが、非常に大きく変わる事柄に対しては、やはりどこか疑いを持ってかかる必要があります。エスニシティという言葉を取り上げて議論することは、多文化社会を考えるうえで非常に重要であることは言うまでもありません。けれども、エスニシティをたとえばいま申し上げた歴史の流れのなかにおいて考えていく場合、どうして現在の時点において急激にエスニシティという言葉が語られるようになったのか、あるいはさまざまな場所で見られるようになったのか。そのこと自体に対してどこかで疑問を持っておかないと、逆にいわば一過性のブームのように、エスニシティや多文化という言葉がまたすぐ忘れ去られてしまう危険性があると考えております。

## 2. 相対化することの重要性

エスニシティとは、私は社会学者ですから社会学の目で見えていくと、社会にさまざまにある差異の一つということになります。たとえば私が新宿や池袋で調査をする場合、そこに外国人の方がいて、外国人調査あるいはエスニシティ調査をするという形をとることが多いわけです。こうしたテーマはとても大事ではあるけれども、調査に出かけて行って、いざ目の前に対象の方が座っていると出会うとき、自分と相手の間の違いとはいったい何なのかということにしばしば頭が向かいます。たとえば外国人調査をする場合、いろいろある違いのなかでもとくにエスニシティというものを、いわばいろいろな違いに優先する形で取り上げていくのがふつうでしょう。

だがもちろん、違いはそれだけではない。たとえば相手は女性かもしれない。私は男性で、相手は女性という違いがある。年齢も当然違うかもしれない。趣味も違う。たとえば音楽の趣味も違う

し、着ている服の種類も違う。そこから始まって、さまざまな違いがそこには本当はあるはずですが、しかし、往々にしてエスニシティという形でエスニックな差、人種や民族に伴う差がほかの差を押し退けて、いわば大きく見えてしまう。こうした差異は長い間忘れられていたことですから、そうした差異があることを思い起こすことはとても大事な事柄であり、それ自体、多文化社会を理解するうえでとても大きな一歩になるわけです。しかし、そこに存在するエスニックな差をあまりにも大きく見てしまうと、逆にアンバランスになってしまう。たとえば性別の差、ジェンダーの差、趣味や嗜好の差、年齢の差といったいろいろな差とエスニシティという差が、本当は同じレベル、少なくともエスニシティだけがとりたてて強調される形では議論されないという形が本当は望ましいのだと思うわけです。

都市とエスニシティという本日のテーマからいうと、少し逆の話をしているような気もしますが、エスニシティというテーマを研究する、あるいは考えていく場合には、いま申し上げたようなある種の注意が必要ではないかと考えています。

このように考えるようになったきっかけですが、私自身も実はいま申し上げたとおりエスニシティというテーマについて、言ってみれば社会学者としておもしろい、とても興味深いテーマだという思いをもちながら非常に素朴な目的意識を持って調査をしていました。しかし今からもう10年近く前でしょうか。アメリカでたまたま研究する機会がありまして、場所はロサンゼルスだったわけですが、そこでさまざまなものを見聞きしていくうちに、印象がちょっと変わってきました。

ロサンゼルスあるいはアメリカは、言ってみればエスニシティが非常に過剰な社会です。ロサンゼルスの場合には多人種、多民族がいわば日常の状態になっている。ですから、私自身もロサンゼルスで調査をするなら、当然、多民族・多人種についての研究、あるいはエスニックスタディーズ

をしたい、そのつもりで調査を始めたわけです。そこでいろいろな方に会って話をしていくうちに、確かに人種的、民族的にはきわめて多様だと感じたわけですが、同時にそれとは違うレベルでいろいろな印象を持つようになっていきました。

確かに目の前にはモザイクのように文化的な多様性みたいなものが広がっている。たとえばベトナム系、イラン系、ラティーノ、アフリカ系アメリカ人、日本人、日系人、コリアン、チャイニーズ、いろいろな人と会って話をするうちに、確かにエスニシティの違いは感じるわけですが、それとは別に、国境を越えて移動する人間としての共通性、あるいは越境者としてのある種のふるまいといったものを感じるようになりました。この場合には、アメリカ社会がそういう人たちの住んでいるホスト社会になるわけですが、自分にとっての異文化としてのホスト社会においてマイノリティとして暮らしていくなかで、人々は自分の夢を実現しようとする。あるいはいろいろ苦しみや悲しみを感じていくなかで、ゆっくりゆっくりとその社会に馴染んでいく。

ここで適応という言葉を使うか、あるいは同化という言葉を使うかによって、いろいろ見方が分かれてくるわけですが、いずれにせよ、自分自身の夢の持ち方、感情の持ち方、情緒、あるいはもっと具体的に明日したいこと、明後日したいことがゆっくり変わっていくのです。むしろそのあたりにもっと目を向けていくべきである。つまり、エスニシティというものをいろいろな差異に先立つ形で優先的に議論していくのではなくて、まずは、1人の人間として異文化のなかでどのように夢や希望を紡ぎ直していくのかということを中心に考えていくべきだと、感じるようになっていきました。いまお話ししたのはアメリカというまさにエスニシティが過剰な社会における経験であって、そこで感じたことは、エスニシティの重要性と同時に、エスニシティにとらわれてしまうことの一種の危うさ、危険性のようなものであったわ

けです。

しかしきょうお話ししたいのは、アメリカの話ではなくて日本の話です。日本でも、実際には同じようなプロセスがいま進行しています。最初の立教大学の紹介のなかでもありましたが、この池袋、あるいは新宿、大久保といった街では、大きな変化がここ5年、10年足らずの間に起きています。

たとえば今年でいえば、6月にサッカーのワールドカップがありました。大久保の職安通りに「大使館」という焼肉料理屋さんがあります。料理屋さんなのですが、「大使館」という名前です。その駐車場に、日本に住んでいる韓国人の方がたくさん集まって韓国のチームを応援している風景がよくテレビや新聞で報道されて、おそらく多くの方がいつの間にか見ていたのではないかと思います。たとえばそういう事柄が日本のなかでもごく日常的に起きるようになってきている。こうした変化をどのように考えていったらいいのかであります。

### 3. エスニシティの2つのかたち

まず初めに、日本社会においてエスニシティというものがどのように位置づけられてきたのかを整理しておきたいと思います。ここでは、第1に「コントロールされるエスニシティ」、第2に「戦略的に創出されるエスニシティ」という二つの見方を挙げておきます。

第一に、エスニシティとは、コントロールされる対象、統制される対象としてあったということをおぼろげに忘れることができません。マイノリティとしてのエスニシティは、ホスト社会における多数派を占める支配層によってしばしば直接的あるいは間接的にコントロールすべき対象として扱われてきたという歴史があります。この場合のコントロールとは、マイノリティの側の希望や意思とは違った形で扱われてしまうことを意味しています。ですから、コントロールの中身は非常に広く、たと

えば抹殺、隠蔽、隔離といった決定的な形でのコントロールの仕方から始めて、一定の制約のなかにおいては存在を認めるといった無視のようなものもあれば、近年でいえば商品化、あるいは文化財として保存するという形での統制、コントロールまでが、その中には含まれます。

この場合に大事なことは、そうしたマイノリティのエスニシティに対するコントロールとは、何も権力を持った支配層だけが行うことではないということです。そういう支配的な文化のなかで大きくなっていった大多数の人間、たとえば私もまた、共通の記憶を通していつの間にかこうしたコントロールを当たり前と思うような人間になってしまっている可能性が大きい。このことは忘れることができないように思います。

もう一つは、戦略的に創られていくエスニシティであります。エスニシティとはホスト社会に暮らすマイノリティの越境者たちが一つの戦略として意識的に創り上げていくものでもある。意識的に創り上げるという意味合いは、次のようなことでもあります。エスニシティとは、移動者、越境者を前提とした場合、移動してきた人間、あるいは越境してきた人間が、移動する前の社会で持っていた文化をさすことが多い。言いかえると、出身地の文化ということになりますが、しかし、元の文化を移動した先でそのまま再現するわけではない。あくまでも移動する人間、越境する人間は、移動した先において元の文化を変形させながら新しい文化を創り上げていく。それがいわば移動する人間のエスニックな文化である。

たとえば、先ほど挙げた大久保などでも新しい文化を目にすることができます。そこに行くと、韓国風のお店や門構えなど、いろいろなサインが見られるわけですが、それは決して韓国の文化を再現したものではなく、あくまでもその場において創り上げられたものなのだという視点を忘れないことが重要だと思います。そういう意味でのエスニシティあるいはエスニック文化とは、出身社会と日本社会のようなホスト社会との間に宙ぶら

りんの形で創られていく。そういう一つの文化の形だと思います。

では、残った時間のなかでいまの話をもう少し具体的に見ていきたいと思います。

#### 4. コントロールされるエスニシティ 朝鮮人の食文化の場合

先ほど抽象的にコントロールという話をしましたが、たとえば、戦前期における朝鮮人の食文化の統制という事例を挙げることができます。戦前の日本において植民地統治下にあった朝鮮半島から多くの朝鮮の人たちが日本列島にもやって来て、住んでいました。そうした朝鮮の人たちは当然、朝鮮の食文化を持っていて、それを支配者としての日本政府がどのように処遇するかということが一つの問題としてあったわけです。

一つの事例として、食文化、あるいは食というものが、朝鮮人を日本人から識別するための一つの資料、あるいは指標として位置づけられていたというケースがあります。朝鮮人を日本において統制する、コントロールするといういわば権力的な目的のために、戦前の日本政府は、日本人と朝鮮人を区別する必要に迫られることがあった。朝鮮人とはだれなのかを見つけ出すための、言ってみれば非常に安易でかつ危ないやり方として、食文化が利用されたということがあります。

「料理ニ鮮魚ノ刺身ヲ用フルハ内地ノ人ト異ナラザルモ、其ノ他鳥獸肉（牛、豚、鶏等）ノ生身ヲ刺身トシテ用ヒ、唐辛、胡椒ヲ好ミ唐辛ハ多量ニ用フ。」  
（内務省「鮮人識別資料」朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成 第一巻』三一書房、1975年、28頁）

このようなものが、たとえば内務省という政府機関によって治安目的のために作られたという歴史が日本にもあったわけです。

また戦前の植民地支配の時代、食文化はいわば朝鮮人が日本へと同化する、あるいは同化させられるプロセスを妨げるものとして位置づけられていました。ですから、そうしたものは徹底的につ

ぶしていくべきだという形で議論された時期もあったわけです。当時の公安当局が作成した資料をあげておきます。

「大阪府の在住朝鮮人同化方策実施に就いて

大阪府においては在阪朝鮮人にたいする同化方策の一端として本年六月以来次の如き事項を実施し好成績を挙げてみますが相当参考になると思ひます（内鮮係）

一、通称朝鮮人市場の取締 在住朝鮮人の特異なる集団を醸成し特有の生活形態を継続せしむるが如き朝鮮人向食料品を販売する市場の新設は之を認めず既存の通称朝鮮人市場は取締法規に抵触するのみならず内鮮融和を阻害するの实情にあるを以て之を廃止せしむること（但し既設のものに対しては漸進主義を以て臨むこと）

二、朝鮮人向獣肉販売の取締 現在朝鮮人向獣肉（牛豚の頭、内臓等）販売の实情は非衛生にして而も内鮮融和を阻害するものあるを以て一箇月の猶予期間を与へ他に転業せしめ将来斯る営業を為さしめざること。

（中略）

四、朝鮮人料理屋飲食店の取締 現在朝鮮人料理屋飲食店は諸種の弊害多きを以て嚴重取締の勵行しその違反者にして悪質なる者に就いては営業禁止処分を付するとともに送還すること。」（内務省「特高月報」昭和11年6月分、朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成第三巻』三一書房、1976年、636-7頁）

朝鮮の人たちが作っていた市場では、朝鮮のさまざまな物産、飲食物が売られていたわけですが、そうしたものを売らないようにさせる、つぶすという方針が打ち出されていたり、あるいは食べ物や飲食店を管理するという方針が打ちだされていたという記述が見られます。

こういう流れは、現在においては強くは見られません。戦後になって韓国料理、朝鮮料理は長い間、たとえばホルモン焼きや焼肉という形で、歴史を刻んできています。ただよく見ると、戦後においても韓国・朝鮮の食文化あるいは食が、さまざまな食文化のバラエティのなかで、言ってみれば

民族差別、階級・階層の差別と結びついて、どちらかというと隠される食文化として位置づけられてきたという歴史があったことは否定できません。

それがいわば逆転していく。つまり、焼肉や韓国の料理がエスニック料理として脚光を浴びる。むしろオシャレな場所、あるいは週末に家族そろって食べに行くような場所に変わっていく。これは、一部の例外を除くならば、比較的最近、だいたい1980年代後半あたりからと言われています。ここから後については皆さんもよくご存じの話ではないかと思えます。

## 5. 戦略的に創出されるエスニシティ

今から5年前、新宿あるいは大久保にある韓国・朝鮮料理のお店を私が大学の学生と一緒に調査をしたことがあります。詳しいことはここでは説明を割愛させていただきますが、そういうお店、全部で44軒ほどを1軒1軒訪ねて調査をいたしました。

そうしたお店は、言ってみれば普段はエスニック文化、あるいはエスニックな雰囲気を持った場所という形で一括される。あるいはメディアのなかで紹介されています。ただ、実際にはその中身は非常に多様です。たとえば、どういう人が朝鮮料理、韓国料理、焼肉を食べているかということではいいますと、日本人中心の場合、コリアン中心の場合という形でそれぞれバラエティに富んでいます。それから、そこでだれが働いているか、だれが料理を作り、だれがそれをテーブルまで運んでくるか。従業員ということではいいますと、これも非常に多様です。この場合には、コリアン、つまり韓国あるいは朝鮮にルーツをもつ人が作っているケースが多いということが見えてくるわけですが、それにしても実にバラエティに富んでいます。

もう一つはお店の外観です。たとえばエスニック性は、ここでは完全に「戦略的に創出されるもの」になっています。はたしてどういうところ

が、エスニック料理を食べる場所として魅力的なのか。わざわざお金をかけてそこに週末に行く日本人であれば、韓国の雰囲気味わいたい。そのためには、たとえばお店の外装、内装を含め、日本人から見て異文化性を漂わせているほうが商品価値があると見なされる。ここから、商品としての「エスニック性」が創出される。お店の側もそうした消費者の側のある種のニーズを感じ取り、あるいはそれに応える形でお店の外装・内装を作り替えていくといったことをだんだん激しく行っています。

お店の外観・内装というところでは、六つの指標をとりあげました。たとえばお店の外にハングル文字の看板が出ているかどうか。店頭で韓国・朝鮮風の飾りつけがあるかどうか。あるいは店内にハングルの掲示があるかどうか等々を44店について調べていきました。

その上で、全体の傾向をみるため、それぞれ一つについて1点として合計を計算してみました。これは社会学者がよくやる手でありすけれども、たとえば店頭でハングル文字があれば1点、店頭で韓国・朝鮮風の飾りつけがあればもう1点プラス、その場合には2点という形で、見た目のコリアンイメージがどのぐらい強調されているかどうかを点数化しそのうえでいくつかのグループに分けて平均点を挙げてみました。たとえば0.7は6点満点の0.7点、2点は6点満点の2.0点です。ですから、点数が多ければ多いほど、いわば見た目のコリアンイメージを強調している、エスニック性を強調しているということになるわけです。別の言い方をすれば、お店を経営していくにあたって、エスニックなシンボルやサインを一つの商品として提供しているという言い方ができるかと思えます。

興味深かったのは、たとえば居住年数との関係でしょうか。総計で見ると、日本生まれの人が経営者の場合は1.2点、日本に在住、滞日している期間が10年以上の場合は3.2点、滞日期間が10年未満の場合には2.9点という形になっていま

す。日本生まれの方は多くが在日のコリアンの方で、その点数が低いのはいろいろな形で理由が想像できます。これに対して、韓国あるいは朝鮮で生まれて日本にやって来た方の場合には点数が高い。高いことも理解可能なわけですが、たとえば在日期間が短い人のほうが若干点数が低い。本当は在日期間が短いほうが本国の文化をより強く持っている可能性が高いわけですから、単純に考えるならば、そのほうがエスニック性を多く打ち出すのが自然と言えるかもしれません。しかし、必ずしもそうはなっていない。むしろ日本で長く暮らしている人のほうがエスニック性を強調するという結果になっているわけです。

これはもう少しいろいろな検討が必要でありますけれども、一つの解釈として、エスニック性とは、いわば戦略的に創られていく一面をもつということの事例となっている。「創られた」ということは、別にプラスとか、マイナスという意味を含んではいません。あくまでも創造された一面をエスニシティがもつということのみを意味しています。

これは食文化というとても限られた範囲の話ですから、この話だけでエスニシティ一般の話に拡張するのは非常に危険ではあります。しかし、越境する人々が新しい環境に適応していくなかで、あるときにはエスニック性、エスニシティを隠す。あるいは弾圧にあって隠すことを余儀なくされる。またある文脈においては、エスニシティをむしろ過剰に、戦略的に強調するというところを行っていく。こうした点はかなり広く見られるといつてよいと思います。エスニシティとは必ずしも自然発生的に生まれてくるようなものではなく、いわばホスト社会の側の権力とか統制によって変形させられたり、あるいは逆に移動していくマイノリティ、越境する人たちの戦略に基づいて創られていくものである。いわばそれらの合成、融合として実際には姿を現わしていくものなのだというところを、ここで確認あるいは強調しておきたいと思います。

ですから、その意味では、エスニシティあるいはエスニックな文化とは、出身社会の「正しい」、あるいは「真正な」文化を表現しているものではなく、先ほど平野先生がおっしゃっていたように、それ自体、トランスナショナルな移動する文化の一つの形なのだとは今では見たほうが良いと言えるかもしれません。

## 6. 都市文化の可能性

もうこれで話を終わりにしたいと思いますが、グローバリゼーションという時代における都市の役割や可能性について、最後に簡単にふれたいと思います。この議論はいろいろあるわけですが、ここでは次のように考えていきたいと思います。

グローバリゼーションの時代における都市の役割は、市民社会の共通の資本あるいは共通の基盤としてある。あるいは都市は、市民社会に対して共通の資本や共通の基盤を提供する容器、器なのだということでもあります。ここで大事なことは、市民社会がもはや国民国家で仕切られたものではなく、トランスナショナル、あるいはグローバルな規模で創られていくものだという点です。移動していく人間たちが国籍とは関係なく市民として社会を創り上げていく。ですから、国境で仕切られたシステムのための道具としての都市ではなくて、そうしたものを越えたところで、あるいはそうしたものの根底で生まれている変化に対して基盤を提供するものとして、都市がいわば役割を果たしていかなければならないということ、これがここでの最後の主張です。

そうした意味での都市の可能性は、先ほど平野先生もおっしゃっていましたが、グローバルな規模で展開していく世界市場、あるいはそれと結託する形で展開する国家のさまざまな戦略や動きに対して、グローバルな市民社会がどのように抵抗、対抗、あるいはそれとは違う空間を創っていくか、それに対して都市がどういう役割を果たせるかという点にある。そして、そこにおいて文

化がどういう可能性を持っているのかを考えていくのが、これからの都市文化研究の大きなテーマではないかと考えております。

資料を完全に説明できておりませんが、時間が来ましたので、ここまでにしたいと思います。どうもありがとうございました。